

健康文化

多様な性と生

鈴木 和代

この3月、35年間在籍した名古屋大学を退職するにあたり「多様な性と生を考える」というテーマで退職記念シンポジウムを開催させていただきました。私の専門は助産学と母性看護学であり、性と生殖を専門とする領域です。私は1999年より助産師を中心に他職種や学生たちとともに性教育グループをつくり、退職後の今も引き続き活動しています。性教育活動を通して多様な人たちに触れる機会は多く、セクシュアル・マイノリティ（セクマイ）の方々とも知り合う機会も少なくありません。セクシュアル・マイノリティの人は全体の5～10%は存在するといわれているので、日常的にどこにでも出会いがあるはずですが、なかなか「見えにくい」現状があります。セクシュアル・マイノリティの方たちと接する中で、新ためて性の多様性の無理解・偏見の存在を感じ、看護の専門職を育成する立場として、正しい性の知識を普及し、性の偏見をなくしていくことの必要性を痛感しています。それは、性が人格の中核部分をしめていることから、性の多様性の無理解と偏見の中で生じる「生きにくさ」がセクシュアル・マイノリティの人たちの自殺率をも高めている現状があるからです。また、性の多様性について考える機会を作ること、理解者を増やすことはマイノリティだけでなく、マジョリティの生き方においても重要です。

1. 性・セクシュアリティとは

人間の性とは、男性、女性の区別としての性、生殖のための性、性欲を満たし、快楽を求めるための性、男らしさや女らしさといった社会的な観点や、男性役割・女性役割というような性役割における性があります。セクシュアリティとは、狭義では性的指向を指す言葉として使われ、広義では人格も含めた性全体を指しています。つまり性・セクシュアリティとは、その人の人格の中核部分として育まれるもの（セクシュアリティ）、行動的側面のみでなく、生理的、心理的、社会的側面を含めた全人格的なものです。

セクシュアリティに触れた看護および他学部生への講義の後に、学生自身の性についての考えを聞いてみました。「人生の中で全てのことが性と関連している」、「人間にとって性は人生を楽しくするもの」、「性は誰にもコントロールで

きない自分自身の本来の姿」、「性とは、自分自身、周囲の人間について学ぶこと」、「性はアイデンティティであり、流動性があり最高の自己実現である」、「性はその人を形作っているものであり、その人らしさを表しているもの」、「多様な性を頭では理解できてもやはり差別・偏見がぬぐい切れない気がする」等々で様々なとらえ方でした。

生理的な性はどのように作られるのか。それぞれの遺伝子を持った精子と卵子が合体してできた受精卵は、針の穴くらいの小さな存在です。分割を繰り返しながら、約5日後には母親の子宮内膜に着床して、やがて受精後266日頃には、成長した胎児は狭い産道を通ります。産道の圧迫がとれた胎児の胸郭は肺に空気が入って膨らんで、はく、それが産声（第1呼吸）となり、自分で呼吸を始めるのです。これが誕生です。これらの過程は、生まれる命が全てが体験する共通の道筋です。しかしながら、共通の道筋を経ながらも、受精卵から現在までの過程を、個人の遺伝子とそれぞれの環境の影響を受けて成長・発達しているため、一人として同じ人間は存在しません。性に影響するホルモン活動も個人差があり、これらが多様な性を持つ人間の存在につながります。

人はみな様々な個性の持ち主として生まれてきます。赤ちゃんは、誰もが自己実現に向かって、幸福に生きる権利がある未来の宝です。その新しい命の誕生に立ち会い、両手で新しい命をしっかり受け止め、母親の胸に渡す瞬間は助産師の至福の時です。誰もが暴力や差別を受けることなく幸せに育て「自己実現」できることを願わずにはられません。

性教育者山本直英は図1に示すように、「自立のピラミッド」で「大人になるということ」を説明しています。これは私も思春期の性教育で活用させてもらっています。人間誰でも生まれた時には、泣いておっぱいを飲むことしかできない存在ですが、りっぱな性的存在です。やがて1人で立ち、二次性徴を迎え、大人のからだへと成長し、さらに精神面においても、生活面においても自立し、その上には社会的自立、頂点には性的自立があります。どの成長段階において、前段階を覆うように発達し、一番外側でしかも一番高いところに性的自立が位置するのです。それだけ性的自立は自己実現においても、人の生涯においても重要な課題と言えます。つまり、性教育は生涯にわたって必要な人間教育であることがわかります。

人間の求愛行動は、男女の中だけではなく、同性同士でも行われます。この説明をある中学校の性教育の場で行ったら、小さな笑いが起こりました。残念ながらこの笑いの意味は多様な性を理解していない少し差別を含んだ「笑い」に聞こえ、改めて性教育の役割の必要性を感じたものです。

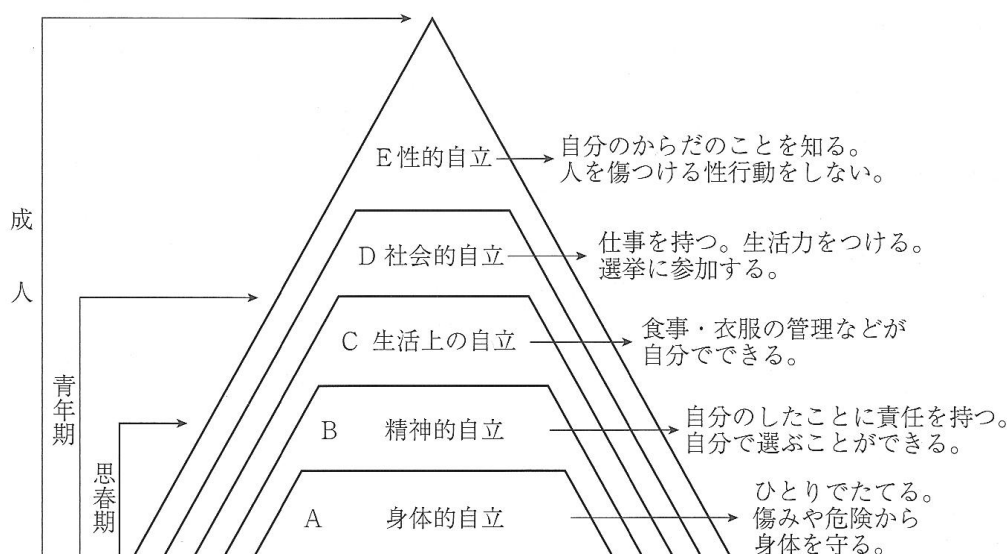


図1 自立のピラミッド (山本直英孝案)

自分のセクシュアリティについてきちんと考え、他者のセクシュアリティも尊重する教育はまだ日本には浸透しているとはいえません。「性は生きることそのもの」であり、基本的人権そのものであるということから、学校・家庭・地域では幅広い実施が求められます。

2. 多様な性

多様な性の具体化のために、「生物的性」、「こころの性」と「性の指向」を組み合わせてみると図2のように27通りの性があるといわれます。つまり、性のあり方はみんな微妙に違うことから「性のグラデーション」という言葉がうまれました。つまり、100%女性、100%男性という人はいないということであり、人の数だけ性があるとも言えるのです。

性の多様性として主なものに Lesbian, Gay, Bisexuality, Transgender(以後 LGBT)があります。現在の WHO の疾病分類 (ICD-10) では、同性愛はかつてのように「異常」、「精神疾患」とはみなさず、現在では治療の対象からはずされ、同性結婚も法的に認める国も増え続けています。性同一障害は疾患として扱うことで、ホルモン治療や性別再指定手術への道が開かれましたが、2015年にはこの障害という言葉が省かれる予定とされています。

現在の日本では、性別再指定手術を受け、性別まで変更した人が約 3,000 人と言われているのですが、健康保険の適応は整っておらず、診療窓口は極端に少ないという問題を抱えており、術後合併症や個別のニーズとリスクに対応できる

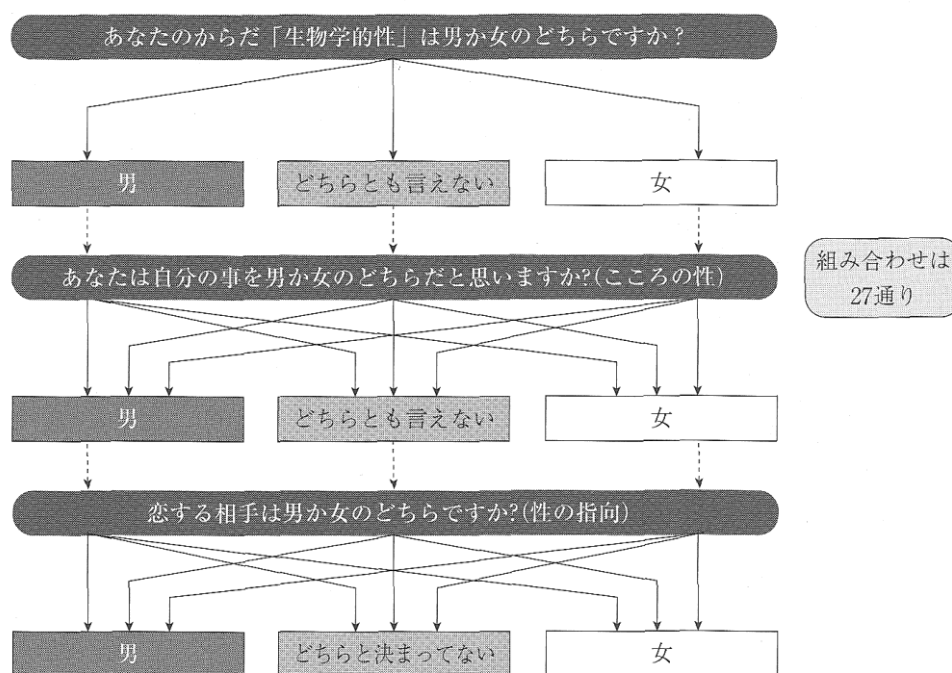


図2 性の多様性 (SEXUALITY No.055 APRIL 212)

医療には程遠い現状です。その他のマイノリティとして、男女どちらとも言えないIS（インターセックス）や無性愛もあります。ちなみに、LGBTなどのセクシュアル・マイノリティは全人口の5～10%、わが国においては600万～1200万人とされています。

医療・看護の場において、LGBTの方たちは理解され、尊厳はまもられているのでしょうか。私自身、20年程前に名古屋で開催された「性と生協議会全国集会」で、同性愛の当事者であるという真摯な男性による「思春期を迎え、どうしても女性ではなく男性に惹かれる自分を知った」という話を初めて聞き「目からうろこ」の体験をしました。それまでは同性愛者の立場にたって考えることはなく、知識もなく偏見しかなかったように思います。先日参加したある性教育の勉強会において、ある男性が中絶について意見を述べた後「言い忘れました。僕はゲイだからこのように考えるということもあります」と追加発言されていました。このように自分のセクシュアリティについて堂々と語れる環境であつたら誰もがもっと生きやすい社会になると思います。

同性愛に対する世界的動向をみると、かつてナチスドイツでは、生殖に結びつかない性的関係を罪だとして男性同性愛者を強制収容所に送り虐殺にした歴史があります。現代においても、世界の同性愛の法律の中には終身刑、死刑と

なる国・地域も存在します。2014年に冬季五輪を開催するロシアがこのたび「同性愛規正法」を成立させたということで国際的な批判を浴びています。

一方、カナダやアメリカの一部の州、オランダ、ノルウェーなどは同性結婚が認められています。特に同性愛者への理解が深いとされるカナダでは、多くの文化が共生する中で、性の多様性について学ぶ性教育の機会が公的に保障され、小学校低学年の段階からセクシュアル・マイノリティに接する機会が設けられています。箱入り4冊組みでLGBTの指導方針が出されており、実際にゲイやレズビアンのお父さんのお母さんのもとで育つ子どももいます。2011年12月には、アメリカのヒラリー国務長官が国連世界人権デーで「同性愛者の権利は人権であり、人権は同性愛者の権利である」と演説して注目をあびました（you-tube参照）。また、最近では、ローマ法王が離婚や性的マイノリティについて肯定的な発言をしたことも報道されたところでもあります。

セクシュアル・マイノリティに関する研究はまだ少ない現状です。Jujo Obedin-Maliverらによるアメリカ・カナダの医学部の学部教育の中のLGBTの課程について行った調査では、課程の時間数は少なく、内容、学生の感受性は開きがあったと述べています。国際的にもまだ未発達な現状と言えます。

日本では、同性結婚は認められておらず、性の多様性に関する教育も進んでいません。その中で「男らしく」、「女らしく」といった社会的性役割に縛られて「生きにくさ」を感じている人も少なくない現状があります。

3. 多様な性と生（まとめ）

私の属する性教育グループ（ナーベルプラ座）では、「男らしさ」「女らしさ」にしばられず性の多様性を尊重し、人間らしさ、その人らしさ、つまりは「自分らしさ」を大切にすることの啓蒙をモットーに活動しています。「自分らしさ」に注目することで「自分を大切に」する気持ちがわき、自尊感情が高まれば、自然と相手をも大切にできます。性は愛を育む一方、暴力や性感染症や予期しない妊娠にもつながることがあります。だからこそ、互いに大切にしよう「個の尊厳」が基本となります。「個の尊厳」はプライベートなところから守られなくてはなりません。これは性の健康の基本であり、豊かなセクシュアリティを育み、豊かに生きることを支える大前提と考えます。

性教育者の村瀬幸浩は「性の多様性を認めることは、人間の多様性を認めること。一人ひとりの存在を大切にすることは平和教育にもつながる」と性教育の重要性を説いています。残念ながら日本にはまだ、自分のセクシュアリティについてきちんと考え、他者のセクシュアリティも尊重するという教育はまだ

浸透していません。育児不安の母親がふえ、虐待・いじめが問題視され、平和への危機さえ感じる今日だからこそ、多様な性と生を尊重した性教育（人間教育）に注目していただきたいのです。

以上、まとめとして、以下のことが伝われば幸いです。

1. 性＝生であり、人間教育として性教育は重要である。
2. 人は多様な性を持ち、多様な存在である。誰もが自立した大人になるために生まれた命として、その個は尊重されねばならない。
3. セクシュアル・マイノリティに対する理解を深め、偏見をなくすことは「男らしさ」、「女らしさ」等にしばられた人たちの解放にもつながる。

最後に、私の好きな言葉に「人類の母性は、人以上の人をうまず、人以下の人をうまず（住井すえ）」があります。この「人類の母性」とは、生物的な父性・母性にこだわらず母なる性であり、それは小さな命を慈しみ育てる性質をさし、女性や母だけでなくすべての人間の心に育つ人間愛であり、個の尊厳そのものと考えます。

（名古屋大学名誉教授、元名古屋大学大学院医学系研究科・看護学専攻 教授）